

春および秋に行われる大会に研究発表の数が集中し、十分な討論ができない嫌いがあった。そこで夏および冬にも講演会を開き、十分な発表時間をとって意見の交換をはかり処期の目的を達しようと考えられた。先日、次の要領で夏季講演会が開催された。

日 時：昭和40年8月27日（金）10:00—17:00

会 場：気象庁会議室

研究発表：14題（うち3題は取止め）

なお、理事長のあいさつがあり、研究発表の終了後行われた懇親会も盛会であった。

次に研究発表は、その分野も変化があり、多数の参加者があり討論が活発に行われた。会は三人の司会者、竹内清秀、斎藤直輔（気象庁）、丸山晴久（気象研）、によって運ばれた。発表の内容に対する意見は次のようなものもあった。（なお、これは司会者および講演企画委員会のものをまとめたものである。（なお内容のあらましは、天気本年7月号249—252ページ参照）

午前中の題目は5つあった。まず、清水ほかの気圧の取入口の発表があった。強風するとき、従来のように建物内に気圧計を置いたのでは、真の気圧を示さないことが知られている。今度、南極に自動気象計を新たに設置するに際して気圧の取入口を戸外に置きその形に工夫をこらした。風洞実験により、多少の斜めから風があっても影響を受けにくい形、円板をみつけた。今後ともこのような基本的な研究が必要であろう。大井の山雲の分類では、興味ある写真および図形が示された。地形によるものと、シノプティックな型によるものとにその成因が分けられるように考えられているが、少々無理があるようである。片山は海面からの熱の輸送について論じた。これまで発表された研究の総合報告でもあった。すなわち、いわゆる相似理論から導き出された熱輸送の式と Jacobs の式とを比較し、後者に出て来る係数の値を算出した。実用の題として有用である。山本・高貫は接地気層における風速および温度の垂直分布を論じた。特に問題にしているのは安実な場合であり、拡散係数を吟味することから問題を解こうとしている。途中、もっともらしい仮定をすることにより、いわゆる山本・Panofsky のもっと一般化したものが得られた。結果は非常に複雑な式となっている。このように垂直分布を詳細に扱うのも重要ではあるが、実測の精度なども考えあわせて、変動量に関する統計量を深く調べて行くことも大切であろう。近藤の空気イオンの人体に対する影響は、気象学関

係者にはわかりにくいものであった。

午後の前半は力学関係の講演が4題でいづれも変化に富み、比較的ゆったりした時間で、聞きやすかった。松野の論文は力作で問題のとり上げ方もよく、半球あるいは全球にわたって予想方程式を積分する時にはいづれは当面する基本問題の一つである。ともかく、基本流が零で、かつ線型化という仮定はあるが、赤道地方で大規模な現象の運動についてはロスビー波と重力波の分離が高緯度におけるように明確に分離されないということは今後、多くの研究者を刺激するであろうし、また、応用問題として、熱的な外力に対する流れの場の模様も興味あるものであった。正野・丸山の凝結核を考えた時の上昇気塊の冷却率の計算は、基本問題の理解という点では面白いが、現実の大気中の過程にとり入れる時には多くの他の影響が強く効くであろう。小元の解析は、我々の最も関心のある、大規模擾乱内の対流の問題である。解析の方法は慎重、入念であるが、残念ながら、プレフロンタルしう雨の大規模擾乱の構造に対する相対的な関係やいわゆる寒冷前線性の降雨との差異に関する説明が不足であったように思う。あるいは著者の聴き方が悪かったかもしれぬ。大井の報告は、現行の数値予報を実際の天気予報に応用した時に現われるいくつかの基本問題、すなわち、小スケールの擾乱が表現されぬこと、地形の影響があること等の問題を実際との差によって論じたものである。いずれも現在の技術の段階ではさけ難いものではあるが、ともかくも切実な問題点を広い分野の人々に知ってもらったことは有意義であろう。

最後に午後の後半についてのべる。冬季の季節風に伴う降水について、最近レーダーによれば季節風時の不安定線に沿った降水域は本州の中央山脈をこえてやゝおとろえ、または消滅したかにみえるが太平洋上に出て再び発達することが観測されている。水越はその降水の及ぶ範囲を統計的に求められて気候区分を行う一つの試みとして吹き出しのあったときの降水日数とその他の降水日数との比をその目安として統計した。その結果、今までなされている区分とやゝ異っている点があるのではなからうか。季節風の吹き出しの時の降水日数又は降水量で統計したらどうなるか。中間報告であるとのことだから今後試みられるであろう。

石原、木下、鈴木らの本邦主要河川の出水についての統計的研究は原因別に出水（指定水位をこえた場合）頻度を16河川について調べ、相互の関連を論じていたが、降水量その他気象条件との関係が出されていないので、応用的意義はやゝ薄くなるのではなからうか。